



技術の学習と文化研究

—フラッグフットと水泳研究に寄せて—

横森茂樹

同志会の体育、教材研究は、水泳から始まりました。子どもはどんなとき、どんなことに喜びを感じるのか、それを阻害する要因は何か、子どもをつまずかせているのは何か…。

子どもに依拠した集団研究の末に、呼吸の大切さを発見しました。しかも、その呼吸法は吸うのではなく「吐く」のだと。子どもの事実から導き出された指導法でしたが、科学的裏づけがあることが、後の研究で明らかになりました。1960年代のことです。

当時は、同志会あげてみんなで一つの研究に取り組んでいました。そのころは会員数が少なかったことや、会員の居住地がほとんど関東・東京だったこともその理由であったことでしょう。また、夏の全国研究大会では、参加者全員が水泳の実技研究を行い、その成果を持って全員で遠泳を行うということが行われていた時期もありました。

その後、器械・陸上・球技などの系統性研究が進み、さまざまな教材研究において、「それはドル平で言えば呼吸に当たる」などの言い方で、ドル平研究で得られた、研究の成果を、他の教材研究に応用して、特質規定・基礎技術づくりを行いながら各種の系統性研究が発展していきました。数教協の水道方式にも学び、水道の水が高いところから低い方

に流れるように、技術の獲得の順序を普遍から特殊へという考え方でつくられていきました。

研究の成果が「学校体育叢書」という形でつぎつぎに出版されていきましたが、うまくすることの研究が進むと、「うまくしてどうする」「うまくするだけでよいのか」という疑問が出されるようになりました。技術指導の系統性研究と体育科教育の内容を考える研究が、その頃からずっと並行して意識され、議論されてきました。別の言い方をすると、運動文化の捉え直しと、体育の授業の中で「うまくすること」の比重をそれ以外の教科内容との関係でどのように押さえるかが、重要な課題となってきました。

私論ですが、それを深める方法は、私たちが掲げる「運動文化の主体形成」という目標に対して、学年・発達段階に沿った教える内容と方法を整理することと、それを学校全体のカリキュラムや、地域性を考慮して創造的につくりあげていくことだと考えます。

各教材において、学習・指導を行うことが、ますます重要でおもしろくなってくると思われます。

(よこもり しげき／東京)